

2020年度 逗子市立逗子中学校 いじめ防止基本方針

2020年4月1日版

I 基本的考え方

1. いじめの問題克服に向けた基本的な考え方

- 早期に発見し、的確な指導を行う
- 校内にいじめを許さない風土をつくる
- 道徳的な規範意識、人権感覚を高める
- 温かい人間関係を築く
- 家庭・地域社会・関係諸機関との連携を深める

2. いじめの定義

いじめ防止対策推進法では「いじめの定義」として、
「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。と規定されている

また、本校では、いじめの状況は生徒の様態や行為、その頻度、生徒同士の関係などから次のようにとらえている。

- 生徒同士が対等の関係ではなく、いじめるものを弱い立場に置くこと。つまり、「弱い子」と言われる子だけがいじめにあうのではない。誰もが対象となる。
- 心理的、身体的に苦痛を伴う攻撃を加える。この苦痛の程度は受けるものによって異なる。
- 行為がくり返し行われる。
- いじめには、加害者、被害者の関係だけでなく、観衆（はやし立てる、面白がって見る等）、傍観者（見て見ぬ振りをする等）が存在する場合がある。

II いじめの防止等に関する基本的な考え方

1. いじめに対する基本的な視点

いじめは、いじめにかかわった全ての生徒の人間形成に多大な影響を与え、人と人との関係を破壊し、時にはかけがえのない生徒の生命を奪うこともある深刻な問題である。

- いじめを単なるけんかやトラブルとして受け止めず、人間関係を破壊したり、人間形成を阻害したりするもので、時には生命の危機にも関わる重大な問題であると受け止める。
- 「いじめられる側にも問題がある」という見方はしない。
- いじめであるか否かは、被害者の受け止め方で判断する必要がある。（「その

程度で…」といった見方は、被害者の心情をかえって傷つける。）

- いじめを未然に防止することやいじめを早期に解消することは、生徒の成長・発達にとって極めて重要な問題として受け止める必要がある。

2. いじめに対する指導について

(1) いじめの防止

- ・ いじめ防止基本方針に基づき、全職員で絶えず情報を共有しながら、チーム返子中として、いじめに対する未然防止・早期対応・早期解消を図る。
- ・ 「わかる授業」の充実を図りながら、生徒の学習意欲を高め、自己実現に向けた豊かな人間性の育成に努める。
- ・ 生徒の個別のニーズに配慮したインクルーシブ教育・支援教育の充実を図る。
- ・ 生徒同士の思いやりの心をはぐくむ**道徳教育の実践と授業の充実**を図る。
- ・ 徹底した「褒める指導」「認める指導」を継続し、生徒の自己肯定感を高める。
- ・ 開かれた学校づくりの推進、地域社会との連携強化を図るために積極的な授業公開やPTA活動等の充実を図る。

(2) 早期発見と早期指導

生徒の出すサインを確実に受け止めるには、日ごろから教職員と生徒、生徒相互、教職員相互、保護者と教職員等との間に温かい人間関係をつくることが肝要である。



- ・ 生活アンケートや日常的な見取りを丁寧に行い、生徒の状況を的確に把握する。
- ・ 保護者、地域からの情報提供が適切に受けられる良好な関係をつくる。
- ・ 生徒の話を傾聴し、いじめられている生徒の悩みを受け止め、支える。
- ・ いじめた生徒に対しては、毅然とした態度でくりかえし指導する。
- ・ 担任が一人で抱え込まないで、校長・教頭へ報告し、他の教職員等に協力を求める。
- ・ 生徒支援部、教育相談コーディネーター、生徒指導担当、スクールカウンセラー、心の教育相談員等、関係分掌・担当者を中心に、生徒支援委員会（**いじめ防止等対策会議**）等において、全教職員で情報共有・共通理解を図り、組織的に対応してい

(3) いじめへの対処

① 教師として<教師としての言動と態度>

- ・ 教師自ら、自分の言動と態度についての自己評価に努める。
- ・ 校内研修会や生徒支援委員会・学年会議などの機会をとおして、教師の言動と態度についての相互評価に努める。
- ・ 保護者や地域住民の意見や考えをとり入れ日々の指導等の改善・充実に努める。

<いじめられている生徒に対して>

- ・自ら訴えてきたことを温かく受け止め、いじめから全力で守ることを約束する。
- ・いじめられている内容や、つらい思いなどを親身になって聞くことにより安心感をもたせる。
- ・本人の活躍を認め励ますことによって、自信や存在感（セルフエスティーム）をもたせる。

<いじめている生徒に対して>

- ・いじめは「絶対に許さない」という毅然とした態度で臨み、まず、いじめることをやめさせる。
- ・いじめられている生徒の気持ちに着目させ、いじめることが相手をどれだけ傷つけ、苦しめていることに気付かせる。
- ・いじめてしまう気持ちを聞き、心の安定を図り、教師との信頼関係をつくる。
- ・当番活動や係活動など、具体的な場での良い行いを積極的に見付けてほめる。
- ・同様の行為が再度見られた場合には繰り返し指導をおこなう。

<学級の生徒に対して>

- ・見て見ないふりをするのは、いじめの助長になることに気付かせる。
- ・いじめを発見したら教師や友達に知らせて、すぐにやめさせることを徹底する。
- ・友達のいいなりにならず、自らの意志で行動することの大切さに気付かせる。
- ・一人ひとりをかけがえのない存在として尊重し、温かな人間関係を築くとともに安心して生活できるようにする。

②学校の指導体制

- ・教師は「きづくこと」「見逃さない」を基盤にした生徒の多面的な理解に努め、問題行動の予防・早期発見を図る。また、いじめの兆候が見られた場合、迅速に組織的な対応を行う。
- ・いじめに関する情報を共有し、問題の状況や指導方法について共通理解を図る。
*生活アンケートを年2回（7月、11月）実施し、記載された件については、速やかにクラス、学年で対応し、校長に報告する。
- ・定期的にいじめなど生徒の行動にかかわる情報交換会等を実施する。
- ・ネットいじめ（掲示板・SNS・ライン他）等、学校生活では見えにくい複雑ないじめに対して、関係機関と連携し的確な対応に努める。
- ・6月、小学校との情報交換会
- ・生徒や保護者が何でも気軽に相談できる学校全体の雰囲気づくりに努める。
- ・いじめの事実関係の把握については正確かつ迅速に行う。その際、個人情報の取扱については十分留意する。

(4) 家庭や地域、関係機関との連携

①家庭との連携

- ・保護者の悩みや気持ちを真摯に受け止め信頼関係を深める。
- ・事実を正確に伝え、家庭での対応の仕方、学校との連携について助言する。
- ・相談機関等について、積極的に保護者に情報提供を行う。
- ・状況に応じて、関係諸機関との連携をとるよう働きかけを行う。
- ・日ごろから生徒や保護者に対して、いじめ等の悩みを受け付ける相談機関等について、積極的な紹介を行う。

②地域との連携

- ・逗子中学校支援地域本部、地域教育協議会（学校評議員）、学校関係者評価委員等を中心に、早期の情報提供を受けられる地域との関係づくりを図る。
- ・民生委員、児童委員との連携を深め、地域との情報交換をおこなう。
- ・状況によっては、具体的な応援を求める。

③関係機関との連携

- ・スクールカウンセラーを含めた関係諸機関との連携を密にするとともに学校における相談機能の充実を図り、いじめの早期発見・早期対応に努める。
- ・サポートチーム等の積極的な運用を図り学校全体でいじめの早期対応に努める。

III 実際にいじめが発覚した場合の具体的対応

1. 中心となる組織＝「緊急対策会議」

校内支援委員会を中心に生徒指導担当等の関係部署

構成メンバー（・管理職・教務主任・生徒指導担当 ・教育相談 CD ・関係学級担任 ・関係学年代表 ・関係総括教諭 ・養護教諭）

※必要に応じて、スクールカウンセラー、PTA役員、関係諸機関等も含む

2. 対応の基本的な流れ

いじめ情報のキャッチ

1. 「緊急対策会議」の召集
2. いじめられた生徒を徹底して守る
3. 見守る体制の整備（登下校時、休み時間、清掃時、放課後等）

正確な実態把握

- 当事者双方、周りの生徒から聴き取り、記録する。
- 個々に聴き取りを行う。
- 関係教職員と情報を共有し、正確に把握する。
- ひとつの事象にとらわれず、いじめの全体像を把握する。

指導体制、方針決定

- 指導のねらいを明確にする。
- すべての教職員の共通理解を図る。
- 対応する教職員の役割分担を考える。
- 教育委員会、関係機関との連携を図る。

生徒への指導・支援

- いじめられた生徒を保護し、心配や不安を取り除く。
- いじめた生徒に、相手の苦しみや痛み思いを寄せる指導を十分に行う中で「いじめは決して許されない行為である」という人権意識をもたせる。

保護者との連携

今後の対応

- 継続的に指導や支援を行う。
- カウンセラー等の活用も含め心のケアにあたる。
- 心の教育の充実を図り、誰もが大切にされる学級経営を行う。

いじめを認知した教職員は、その時に、その場で、いじめを止めるとともに、いじめにかかわる関係者に適切な指導を行う。あわせて、本校の「**問題行動等発生時の対応・連携図**」に従い、関係部署に連絡し、管理職に報告する。

(1) いじめられた生徒・いじめを知らせた生徒を守り抜く

○いじめられていると相談に来た生徒や、いじめの情報を伝えに来た生徒から話を聴く場合は、他の生徒たちの目に触れないよう、場所、時間等に慎重な配慮をする。また、事実確認は、いじめられている生徒といじめている生徒を別の場所で行うこととする。

○状況に応じて、いじめられている生徒、いじめ情報を伝えた生徒を徹底して守るため、登下校、休み時間、清掃時間、放課後等においても教職員の目の届く体制を整備する。

(2) 事実確認と情報の共有

○いじめの事実確認においては、いじめの行為を行うに至った経過や心情などをいじめている生徒から聴き取るとともに、周囲の生徒や保護者など第三者からも詳しく情報を得て、正確に把握する。なお、保護者対応は、複数の教職員で対応し、事実に基づいて丁寧に行う。

○短時間で正確な事実関係を把握するため、複数の教職員で対応することを原則とし、管理職等の指示のもとに教職員間の連携と情報共有を随時行う

把握すべき情報例

- ◆誰が誰をいじめているのか？ …………… 【加害者と被害者の確認】
- ◆いつ、どこで起こったのか？ …………… 【時間と場所の確認】
- ◆どんな内容のいじめか？どんな被害をうけたのか？ …………… 【内容】
- ◆いじめのきっかけは何か？ …………… 【背景と要因】
- ◆いつ頃から、どのくらい続いているのか？ …………… 【期間】

※ 生徒の個人情報は、その取扱いに十分注意すること